

大学博物館の設置状況と収蔵資料の活用

——考古学資料を中心に——

上 野 恵 司

1.

大学博物館（ユニバーシティ・ミュージアム）とは、国・公・私立を問わずに大学等の高等教育機関が設置する博物館である。近年、国は大学博物館の設置にあたり、その理念を明確化し、「社会に開かれた大学」政策に対応するよう求めている。¹⁾

このような動向の中で、まず大学博物館がどのような資料を収蔵し、設置されてきたか、その過程を把握してみたい。ついで、収蔵資料の中で考古学資料を取り上げ、その政策に対応できるような活用法について、若干考えてみたい。

2.

大学に博物館が設置される最も古い例としては、1682年に設立されたイギリスのオックスフォード大学付属博物館であるアッシュモレアン博物館とされる。この博物館は、エリアス・アッシュモールにより寄贈されたコレクションを中心とした博物館であり、その運営は専門職員の配置や教育施設の設置、展示法をみても、当時としては画期的であり、近代博物館の先駆けとも位置づけられている。

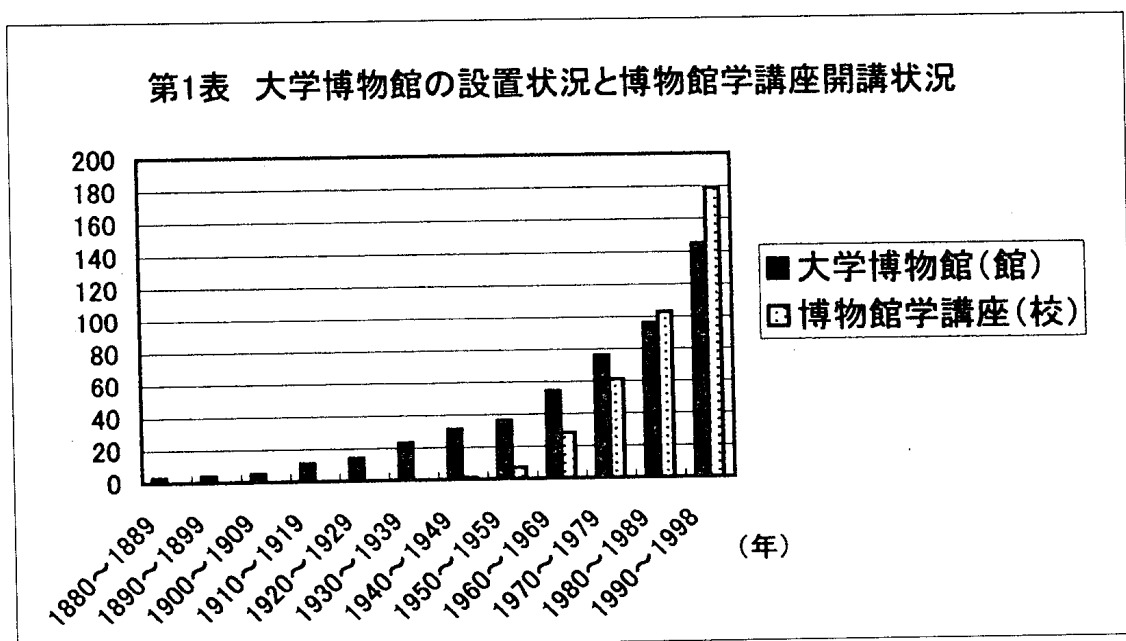
日本において最も古い大学博物館については、研究者間の博物館に対する考え方の相違から二説ある。何れも東京大学に設けられたものであるが、

1877年代の後半に工部大学校の施設として創られた「博物場」を最初とする考え方や、1894年に工科と理科に設けられた専門分野別の「列品室」を最初とする意見などがみられる。

1900年代初頭には、自然系の大学博物館が相次いで開設される。これは、自然科学系の大学において、学術標本資料が重要視されていたためと考えられている。人文系の博物館としては、1914年に開設された京都大学文学部博物館が最初とされる。その後、1920年代の後半になると國學院大學考古学資料室など、私立大学にも人文系の博物館が相次いで設立されるようになる。

大学博物館は、1960年代を境に、急激に設置されるようになる。これは、当時の経済状況が密接に関わっていると思われるが、博物館学芸員資格取得のための、学芸員講座が各大学に開設された時期でもあり、資格取得にともなう館務実習の場として、大学博物館の設置が意識された点もあると思われる。

具体的に設置されている大学博物館の内容を館種別に比較してみると、人文系、自然系では、人文系の博物館数が多い状況を示している。これは、人文系の大学数が自然系に勝っており、付設される博物館も人文系が多いのは、当然の結果ともいえる。人文系の博物館の中では、国公立・私立とも歴史系が最も多く、国公立では59%、私立では74%にも当たる。

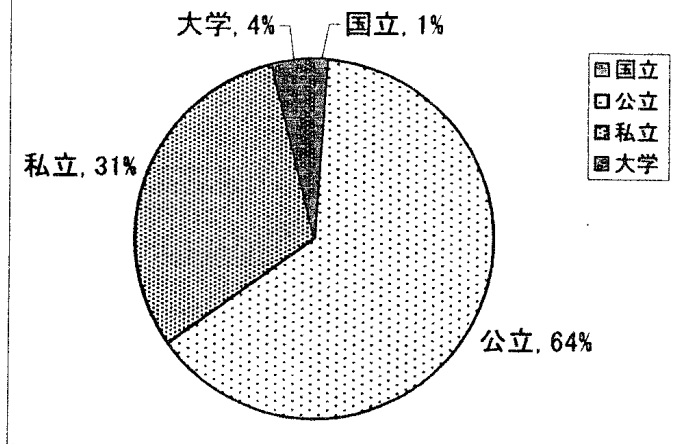


1998年では、大学博物館は145館を数える²⁾。大学博物館の数は、全国の博物館の総数と比較すると僅か4%であり、博物館が最も進んでいるアメリカにおいては、1990年では526大学794館の設立が報告されており、日本における大学博物館の設置がいかに遅れているかがわかる。

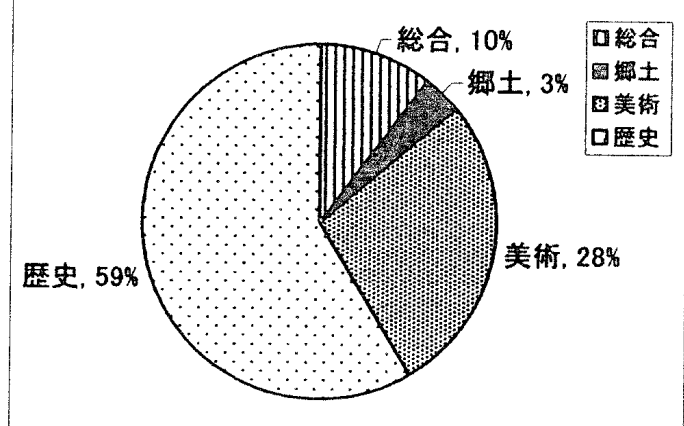
韓国においては、現在ではその設置基準がはずされたものの、かつて国立の人文系総合大学には、大学博物館の設置が義務づけられていた。この基準が廃止された現在においても、韓国では大学設置にあたって博物館が併設される傾向にあるといわれている³⁾。

日本においては、大学における博物館の設置基準は設けられていない。今後、文部科学省が目指す「開かれた大学」政策¹⁾においても、大学内博物館を設置することは不可欠と思われ、法的な整備も求められる。

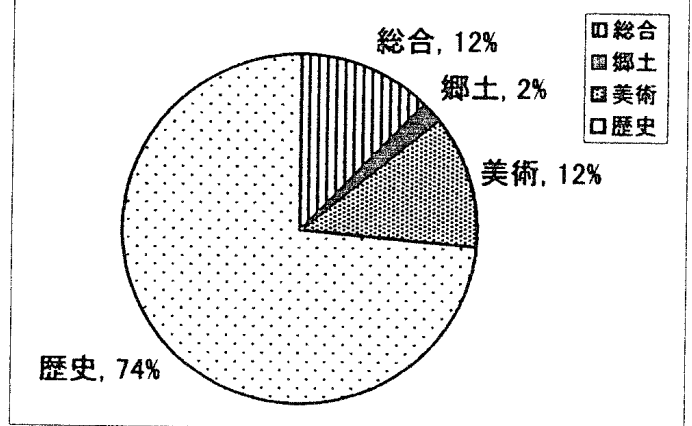
第2表 設置者別博物館数の割合



第3表 国公立大学博物館の館種別館園数



第4表 私立大学博物館の館種別館園数



3.

博物館資料は、その分類として加藤有次氏⁴⁾の一次資料（直接資料・実物）、二次資料（間接資料・記録）、倉田公裕氏⁵⁾のモノ（一次資料・二次資料）、情報という考え方がある。ここでは倉田氏の「モノ」・「情報」という観点から、考古学資料の活用について考えてみたい。

モノとしての考古学資料は、発掘に関係するもの全てであるが、一般の博物館の展示では、その歴史的な流れが必要で、見栄えがする土器等が選択されるが、大学博物館はそれ以上に学術標本資料としての価値が高いものが選択されるべきである。

考古資料には、重要な学術標本資料として発掘されたものの中にも、その性格上多くの破片資料を伴う。この破片資料の取り扱いについては、大学博物館に限らずその量の多さゆえ収蔵・保管場所に困っているのが現状である。重要な標本資料とはいえ、多量に出土した場合、破片全てを展示するわけにいかず、どうしても収蔵・保管ということになる。これらの資料は、出土資料が少ない場合は、学術標本資料として何度も活用されると思われるが、多量な場合は全て活用される場合は少なく、貴重な資料ではあるが収蔵庫で保管のみされている場合が多い。

これら破片資料の活用については、大学博物館ではないが、出光美術館において、この破片資料の有効活用⁶⁾が行われている。それは、博物館内に「陶片資料室」を設け、展示ケースの下に作られた引き出しの中に、年代の基準となるような破片を収納し、自由に比較できるようになっている点である。これは、研究者等にも好評であり、破片といえ、多くの情報を有する学術標本資料の有効活用になっている。

大学博物館における破片資料の活用は、テンバコ展示なども考えられる。通常、発掘された考古学資料は報告書作りの段階で選別を受け、一般に公表される。それ以外の資料は、テンバコに入れられ収蔵される。このテンバコに収蔵

された資料は、埋蔵文化財センターなどでは、遺構ごとに、型式別に整理し保管される。このような方法で保管された破片資料を、展示されている資料と合わせ、特別展示会などを開催し、公開する方法もあろう。

展示スペースの問題もあり、一つの遺跡あるいはその中の重要とされる遺構出土のものに限定する必要があると思われるが、破片活用の一方法ともいえる。展示会開催中は、更に研究者向けの日時を設定し、その日は展示資料を含め直接手にとって観察してもらうような措置も考えられよう。このような活動が、学術標本資料の有効利用にも繋がるとと思われる。

また、破片の利用法として一般の博物館に多くみられるのは、賛否も多いとしながらも、子供達に直接ふれるような資料として使用している例である。実際のモノに触れることは、見学するより格段、モノの理解に繋がるといえよう。

文化財センターなどは、教育普及活動の一環として出張授業を行い⁷⁾、破片やあまり展示に使用されないような完形に近い土器をもって各小学校などを廻り、好評を得ている。また、学校が歴史等の授業でその進み具合に合わせ、博物館に来館し、それに関する資料を学芸員から説明を受けるといような、学校教育の場としての博物館の活用も多い。しかし、このような活動は、最近のゆとりある教育の方針に伴い需要が多く、全てに対応できない状況にあるといわれている。大学博物館も、このように収蔵資料を利用する方法もあると考えられるが、学術標本としての価値ある資料はまず、学内の教育研究支援に使用すべきであろう。

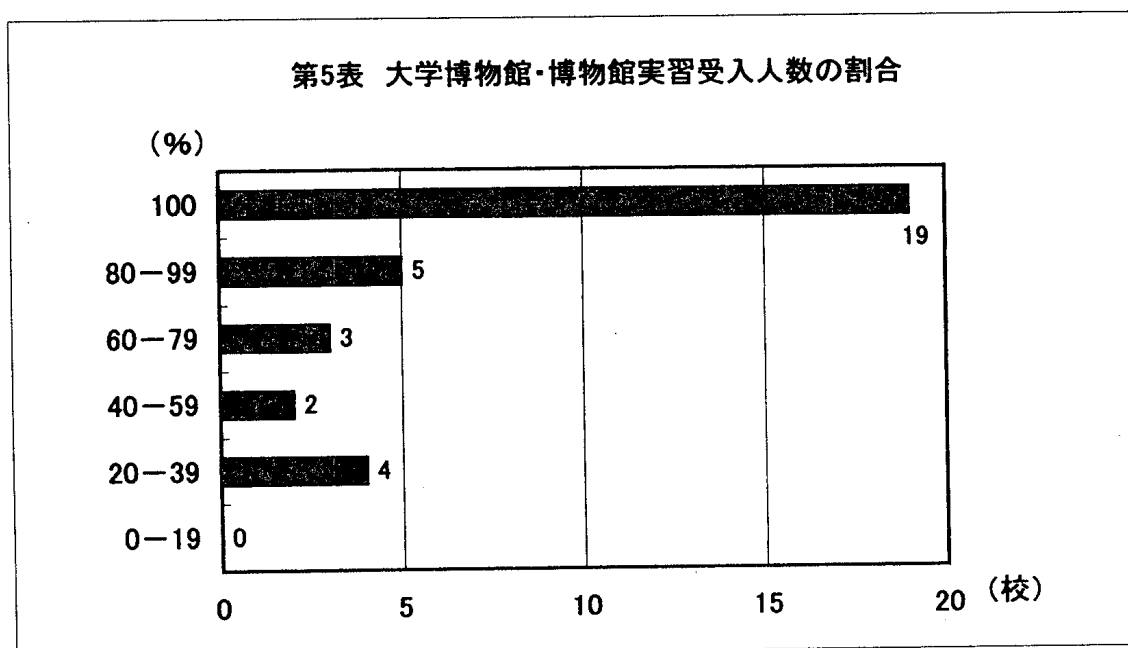
大学博物館が行える教育研究支援については、講義内での活用・館務実習・体験学習・公開講座等、さまざまな活用が指摘されているが、その中の一つ学芸員資格取得に伴う館務実習などで、この資料を活用するのが一番と考えられる。それらの資料を実際使用することで、自大学が収集している貴重な学術標本資料の理解にもなり、直接触れるという点では、より一層真剣な実習に繋がると考えられる。また、講義で資料の取り扱い等は学んできており、資料の破損等にも十分注意するであろう。

しかし、現時点で館務実習を自大学で全て行なっている例は、まだ多くない

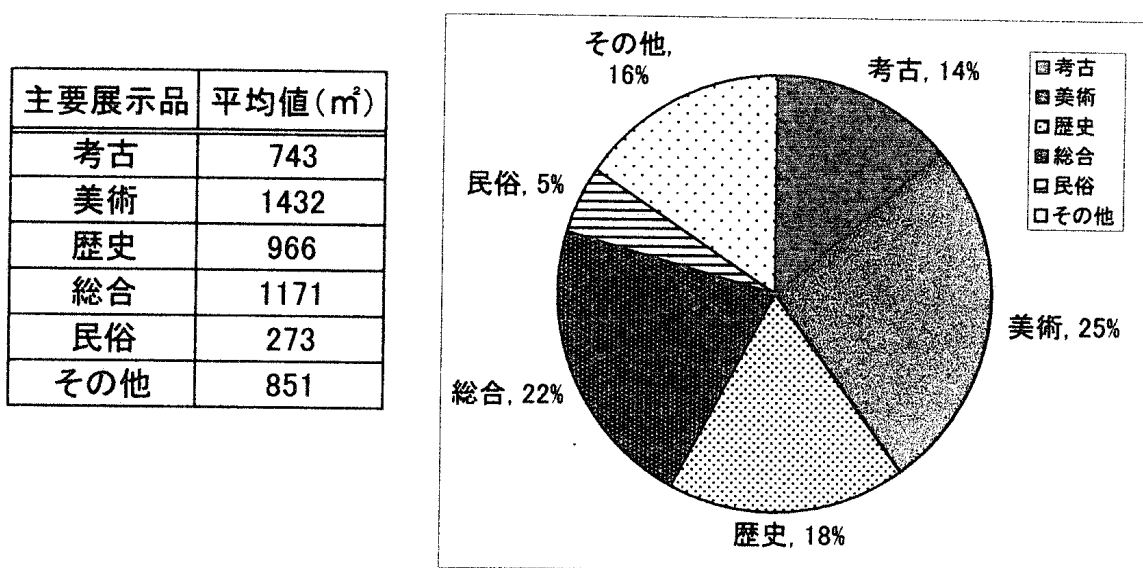
状況⁸⁾である。その理由は、人員の配置と実習施設の確保に問題があると思われる。博物館法（昭和26年制定）では、現在は登録・相当博物館以外は専任の学芸員の設置が義務づけられていない。そのためか、大学博物館の学芸員について状況を窺うと、専任の学芸員が少なく、大学教員・職員の兼務という状況が多い。これは、人件費の問題もあると思われるが、学芸員が常勤していない場合、多くの問題が起こる可能性が考えられ、専任学芸員の雇用が望まれる所である。

また、人員という点については、補助として今後その活用が博物館活動において重要な意味を持つだろうと指摘⁹⁾されている、ボランティア活用なども考えられる。考古学におけるボランティアの活用としては、一般の博物館の例としては、葛飾区郷土と天文の博物館が実施している「葛飾考古学クラブ」の活動などがあげられる。大学博物館においては、このボランティアに学芸員課程を修了した、大学院生や卒業生に協力してもらう方法もある。

施設的には、歴史系大学博物館の床面積を、考古・美術・歴史・総合・民俗・その他に分類し比較してみると、主として考古学資料の展示してある博物館の面積は、平均743㎡と人文系の博物館の中では、民俗につぐ狭さである。この面積状況では、実習室も十分に整備されているとは考え難い。



第6表 主要展示品別床面積



貴重な学術標本である考古資料を使った実習を考えても、その環境が整わないでは、机上の論議となってしまうかねない。大学博物館が、教育研究支援の基盤施設としてなるためには、設置者側のより一層の理解が必要であろう。

4.

最近の博物館の大きな役割として、情報公開がある。この点について、いかに大学博物館は対応すべきであるか、情報としての考古学資料を中心にその活用を次に考えてみたい。

考古学資料における情報は、西野嘉章氏が指摘する¹⁰⁾ような発掘調査時の詳細な記録もあると思われるが、それ以外にその遺跡を資料収集場所として選んだ根拠や、当時の発掘関係者なども重要である。とくに、発掘の報告書には出ない、陰でその発掘を成功させるために努力してくれた人などの情報は、当時の人間関係が明確になり、考古学史の研究には必要な部分といえる。また調査が、新聞記事などに発表された場合、その新聞を保存しておくことも、当時の社会情勢と発掘に対する考え方などがわかり後の貴重な資料となる。

大学博物館が収蔵する考古学資料には、個人が収集したコレクションが寄贈

された例も多い。このような場合は、従来その調査研究の中心となってきた遺構・遺物等の研究以外に、寄贈者の人間像や経歴、コレクション収集の背景、その大学博物館を寄贈館として選んだ理由など、それに関する全ての情報の収集に努め、その後の調査・研究に対応できるような形が望まれる。

そのためには、従来の遺構・遺物中心の資料調査カードでは対応は無理であり、パソコンや情報機器などを使用した新たな資料カードが求められよう。また、人物が関わってくる場合は、ビデオなどを使用し、映像として今後保存しておくべきである。

一般的な博物館の展示では、これらの情報は、遺物なら年代と名前を書いた簡単なキャプションとして展示ケースに入れられる。しかし、大学博物館においては、一般博物館と同じような、キャプションのみではその価値は半減してしまうと思われる。学術標本資料を有する大学博物館は、この情報をさらに活用すべきである。

情報全てを、展示ケース内に一緒に掲げることは無理と思われるが、記録として展示解説シートや博物館刊行の出版物に載せるなど、情報資料の活用は多く考えられる。従来、展示資料の解説に主がおかれがちな解説シートに、このような情報を載せれば、来館者の興味がわき、大学博物館が収蔵する学術標本資料の理解にも繋がろう。

また、大学博物館は情報資料として、展示してある資料に関係する文献を全て収集し、それを公開することにより、学術標本資料としての価値を広める必要もあろう。古い発掘報告書は、当時の出版事情や予算の問題もあり発行部数も少なく、現在、研究者でも手に入りづらいものも多い。このような状況の中で、大学博物館は館蔵している資料に関係する全ての刊行物を収集し、その研究の基礎となる文献を、まとめて一冊の本として出版することも、研究機関としての大学博物館の使命ともいえよう。最近、立正大学博物館で出版した館蔵資料「基礎文献」叢刊¹¹⁾などは、まさにそれに当たろう。

情報公開においては、現在パソコン等の機器の活用は不可欠である。情報機器を使った展示解説、パソコンを使った資料のデジタル化と公開など、大学博

博物館に限らずこの分野が現在の博物館活動の中心となっているような部分もみられる。東京大学で行われた、特別展示であるデジタル・ミュージアム2000などは、今後博物館活動にいかに関係するべきか、一つの指針となる特別展示であった。

大学側ができる情報公開については、多くの指摘があるが、結論的には大学内の他の研究施設や他大学の博物館、地域の博物館、文化財センター等と協力して、幅広い情報を公開し、今後地域文化の情報発信基地となるよう求めている。もちろん、その作業においては大学博物館のみでは限界があり、各大学に併設されている、多様性を有する施設である情報センターなどとの協力が不可欠である。

このよう中で、実際に大学博物館は情報公開をいかに行っているか、考古学資料を主として展示している大学博物館12館のホームページから¹²⁾、その様相を窺ってみたい。

ホームページの内容は、①施設概要・利用案内、②収集資料目録と写真、③企画展・公開講座の案内、④出版物、⑤英文による案内、⑥その他、に大体集約できる。全てホームページ上で掲載している大学は全体の中で2校であり、一番多いのは①と③と④を主とする3項目の情報提供である。

充実したホームページを有する大学は、パソコンで打ち出した枚数で、100枚を超える情報であり、全ての収蔵資料の目録から、写真がリンクできるようになっている。またその他としては、博物館で使用している資料閲覧等の書式や、所蔵している文献リストなども、パソコン上から検索できる。

ホームページ上で、考古学資料の情報公開として窺える状況は、②に伴う資料カードのデジタル化が中心である。これらの作業は、検索等が便利になる利点があり、どの博物館でも行われているが、既に指摘したように単に既存のカードをコピーするような形に留まらず、従来別に保存された写真やそれに関係する文献などは、パソコン上に取り込み、資料カードと一体化しておく方が便利である。劣化が激しいものは、現物はそのままでも、パソコン上ではソフトを使用して修正し、資料として活用しやすい状態に加工して掲載すべきであろう。

考古学資料に限らず、その他周辺機器が揃えば、資料の更なる情報化が進むと思われるが、現状では大学博物館における考古学資料の情報化としては、資料カードのデジタル化と、ホームページの作成などが中心といえる。まず、できる範囲で、修正写真や文献資料などを付加した新たな情報を簡単に引き出せる、資料カードのデジタル化を進めるべきであろう。

資料カードのデジタル化が終了した時点で、これら資料を幅広く利用してもらうためにはどのような活用法があるか、対象者を意識した公開法を考えるべきである。

ホームページ上で、読み取れる情報では各大学博物館等、その内容に努力している点が見られるが、全体としては、他の博物館との協力がそこには窺えないように感じられる。大学博物館が情報の発信基地となるべきためには、内外の大学を含めた施設とのリンクは必要不可欠であろう。

考古学における遺物研究においては、年代基準資料となるべき資料と比較することは重要な事であり、他大学博物館等と協力し、時代を表す遺物の標識名などで検索すると、各大学で収集した資料までたどり着けるような、協力体制は必要と思われる。

博物館学芸員課程においては、全国大学博物館学講座協議会（全博協）のような、各大学を繋ぐ協議会が存在するものの、大学博物館同士においては、このような組織は存在していない。今後、全博協などが中心になり、小部会として大学博物館連絡協議会などの組織が必要と思われる。

ただし、検索し画面上でその資料を見て終わるようでは、そのようなシステムを作った意味は何もなくなる。資料の情報公開は便利であり、博物館利用者に対しては、大きなサービスになるといえる。しかし、博物館本来の役割は、実物資料を通しての生涯学習の場であり得ることに注意しなければならない。

5.

以上、大学博物館の現状を把握し、大学博物館が実際行える範囲内での考古

学資料の活用について若干考えてみた。

現状は、資金や施設の問題もあり、理想とはかなりかけ離れたものといえる。大学博物館は、他の一般の博物館と異なり、その大学特有の学術標本資料が存在している。それが、大学博物館の大きな特徴といえる。この資料を利用し、一般のアミューズメント的博物館では難しいような活動を、大学博物館は心がけるべきであろう。そのような活動が、大学と地域を結ぶ契機となり、ひいては大学博物館が、総合研究の場として、生涯学習の場として役立つ施設になるものと思われる。

博物館の活動は、全ての学問に通じるものである。知識の集合体である大学において、まず情報化の第1段階として、その知識を有効に使える、施設を含めた人間同士のネットワーク化が、今後大学博物館の課題であろう。

この問題は、大学全体に関わる問題であり、教員・事務員全てを含めた大学全体の理解と協力が必要である。今後、近い将来必ず広がる大学博物館への「評価」に備え、関係者が一丸となって努力すべきであろう。

注

1) 文部省学術審議会学術情報資料分科会学術資料部会『ユニバーシティ・ミュージアムの設置について—学術標本の収集、保存・活用体制の在り方について—』(報告) 1996年

2) 分析にあたっては、

伊能秀明・引田由美子・鈴木さおり「大学博物館に関する基礎的考察—データに見るその現状・1995年九月—」(『明治大学博物館研究報告』第1号 平成8年)

伊能秀明・鈴木さおり・唱 桂子・水口尚子「日本の大学博物館(1)—北海道・東北・関東・甲信越の52館・1996年9月—」(『明治大学博物館研究報告』第2号 1997年),

伊能秀明・唱 桂子・福田香織・熊澤優佳「日本の大学博物館(2)—東京の38館・1997年9月—」(『明治大学博物館研究報告』第3号 1998年)

伊能秀明・唱 桂子・福田香織・中台尚秀・熊澤優佳「日本の大学博物館(3・完)—東海地方以西の47館および補遺の7館・1998年9月—」(『明治大学博物館

研究報告』第4号 1999年)

を参考にさせていただいた。

- 3) 西谷 正「韓国における大学博物館」(『ミュージアム九州』30 平成元年)
- 4) 加藤有次『博物館総論』(雄山閣出版 1996年)
- 5) 倉田公裕『博物館学』(東京堂出版 1975年)
- 6) 朝日新聞社『古唐津と出光美術館』(1983年)
- 7) 石井伸明他「収蔵資料の学校における活用—埼玉県埋蔵文化財調査事業団の取り組み—」(『研究紀要』第16号 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2001年)
- 8) 分析にあたっては、全国大学博物館学講座協議会『全国大学博物館学講座開講実態調査報告書(第9回)』2002年、の資料を参考にさせていただいた。
- 9) 社会教育審議会社会教育施設分科会報告「社会教育施設におけるボランティア活動の促進について」(1986年)
- 10) 西野嘉章『大学博物館—理念と実践と将来と—』((財)東京大学出版会 1996年)
- 11) 立正大学博物館『久保常晴氏収集寄贈 樺太考古学資料』(館蔵資料「基礎文献」叢刊 第1輯 2003年)
- 12) 分析にあたっては、以下の大学のホームページを参考にさせていただいた。
大谷女子大学博物館 関西大学博物館 國學院大學考古資料館 國學院大學栃木学園参考館 国際基督教大学博物館湯浅八郎記念館 札幌大学埋蔵文化財展示室 玉川大学教育博物館 同志社大学博物館 南山大学人類学博物館 明治大学考古学博物館 立正大学博物館 和洋女子大学文化資料館

参考文献

- 大堀 哲監修『博物館資料論』(樹村房 1999年)
- 大堀 哲監修『博物館実習』(樹村房 2002年)
- 岡田茂弘「ユニバーシティ・ミュージアムの役割と将来構想」(『博物館学研究』Vol.32 No.5 1997年)
- 熊野正也「大学博物館の社会的な係わりとその接点」(『明治大学博物館研究報告』第1号 1996年)
- 熊野正也「大学博物館のあるべき姿への一試論」(『Museum Study 明治大学学芸員養成課程紀要』第3号 1992年)
- 黒沢 浩「大学博物館における教育活動—生涯学習と大学教育とのかかわり—」(『明治大学博物館研究報告第2号 1997年)
- 古賀 忠道監修『博物館学講座2 日本と世界の博物館史』(雄山閣出版 1981年)

大学博物館の設置状況と収蔵資料の活用

駒見和夫 「生涯学習と博物館教育」(『国府台』4 和洋女子大文化資料館・和洋女子
大学博物館学課程 1993年)

駒見和夫 「博物館における教育の意義」(『国府台』11 和洋女子大文化資料館 2001
年)

全国大学博物館学講座協議会西日本部会編 『概説博物館学』(芙蓉書房出版 2002年)

(株)丹青総合研究所 特集「博物館の評価」(『Museum Data』Number4 1985年)

(2003年7月9日受理, 7月16日採択)